

市民研究 世界の環境ニュース

## 第4回 日本と世界の生ゴミ問題

石塚 隆記 (市民研・理事)

### 1. はじめに

生ゴミをごみ箱に捨てる時、たまに気になることがある。この野菜くずや魚の内臓などは、本当にごみなのだろうか？と。私の住む東京都区部では、生ゴミは全部焼却処理されて、焼却処理の後に出てくる残渣は、その大部分が東京湾の海上の処分場に埋立処分されている。燃やすにも埋め立てるにもお金はかかるだろうし、燃やして埋める以外の使い道がないのかな、と。まずコスト面、次いで他国（欧州）との比較の面で、生ゴミの全部焼却処理がどうなのか少し考えてみたい。

### 2. コスト面

統計資料によると、東京都民の家庭ごみ（燃えるゴミ+燃えないゴミ+資源ゴミ）の排出量は一日あたり867g（うち、生ゴミは214g）。ごみ処理（収集+運搬+処分）の費用は1トンあたり56,395円。つまり、都民一人は一日あたり、49円のごみ処理費用（うち、生ゴミ分は12円）を税金で支払っている、ということになる。

画期的な技術革新があって、生ゴミ処理にお金がかからなくなって、毎日一人12円分の税金を払わず済むのであればうれしいけど、その画期的な技術革新のためにより多くの税金を払わなければならないのであれば、コスト面でその技術開発の計画は受け入れられないだろう。

ただ、ごみ処理費用49円/人/日というのは東京区部のごみ処理システム全体を動かすのに年間にかかったお金を単純に都民の数と年間日数で割っただけなので、生ゴミ処理のコストフリー化に伴い、全体最適化が行われれば、そもそもの費用49円/人/日を下げることが可能かもしれない。いずれにしても、ベースラインとして家庭ごみの処理には49円/人/日かかっている、これが多いか少ないかは、個人の判断による。なお、これは、電気代、ガス代、水道代と同程度だろう。

### 3. 他国との比較

では、他国ではどうなっているのか？統計資料が手に入りやすい欧州を見てみよう。EU28か国とその周辺4か国（ノルウェー、スイス、アイスランド、トルコ）の家庭ごみの処理の実態をまとめたレポートによると、次の3点を指摘できる。

第一に、国別に家庭ごみの中に占める生ゴミの割合がかなり異なる。例えば、マルタは家庭ごみ全体

の60%から80%が生ゴミなのに対し、ノルウェーやスロベニアは家庭ごみ全体の20%以下が生ゴミである。なぜここまで国別で生ゴミの割合が異なるのか、このレポートには書いていない。生活習慣や法規制が異なるためなのだろう。気になるところである。

2点目は、欧州では生ゴミの堆肥化（生ゴミの焼却処理に変わるリサイクル方法として期待されている方法）は一部で行われているが、堆肥化で作られた堆肥や土壌改良剤の品質基準がない。欧州委員会は、欧州に统一的に適用できるこの品質基準を2014年内に作ろうとしているらしい。品質基準ができれば、堆肥化処理で作られる堆肥や土壌改良剤の供給先が明確になることが期待されている。

3点目は、そもそもEUには、生ゴミのリサイクルを促進するための法的枠組みがない。

#### 4. 終わりに

東京での生ゴミ処理の現状を見るとともに、欧州での動向も眺めてみたが、個人的な印象として、東京で焼却処理以外の生ゴミ処理の方法を模索することは、社会全体として優先順位の高いことではないのかもしれない。

むしろ今は、話は少し飛ぶが、食品廃棄物（※）を減らすための努力に社会的なリソースをさくべきなのかもしれない。全世界では、約8億人が飢餓で苦しんでいるのに対して、毎年13億トンの食品廃棄物（約32億人の飢餓で苦しむ人たちの空腹を満たすのに十分な食品の量）が発生していると言われている。

こういった分野をまたぐアイデアを議論するのは市民が得意とするところだろうし、そういった部分に光をあてるような活動に市民研として貢献していけたらと考えている。

（※）この文書で、生ゴミは調理中の野菜くずや魚や肉の食べられない箇所等を指し、食品廃棄物はまだ食べられるのに捨ててしまっている食品（流通の過程で賞味期限が切れたもの、食べ残し等）を指す。

#### 参考文献：

- ごみレポ 23 2014、東京二十三区清掃一部事務組合
- Managing municipal solid waste — a review of achievements in 32 European countries, EEA Report No 2/2013
- Webpage of The Think.Eat.Save campaign of the Save Food Initiative